

都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積 ——アメリカ都市における「ポスト・モダニズム」に関する省察——

デイヴィッド・ハーヴェイ*
(加藤 政洋**・水内 俊雄***訳)

David Harvey
Flexible accumulation through urbanization:
Reflections on 'post-modernism' in the American city
Antipode, 19, 1987, pp. 260-286
© 1997 Blackwell Publishers

「プロレタリア革命とは、人文地理の批判を通じて、個人と共同体がみずからの領有にふさわしい場所と事件を創造するということであり、単なる自分たちの労働の領有や自分たちの全体的な歴史の領有に対する批判的なのではない」（ドゥボール, 1993, p. 190）

「ご時世はつらいが、（ポスト）モダンである」（イタリアの諺に加筆）

序論

ブルーイット・アイゴー団地（ル・コルビュジェの「近代的住居の機械」の一つの変種）がそこに居住していた低所得の人びとにとっては住むに適さない環境ということで爆破されたのは1972年7月15日午後3時32分であった。チャールズ・ジェンクス（1978, p.12）によれば、その時にモダニズム建築は象徴的終焉をむかえ、ポスト・モダンへの移行がはじまったということになる。そしてそのすぐあとに、ニクソン大統領は公式に都市危機の終結を宣言した。

1972年は、先進資本主義の政治経済におけるその他あらゆる種類の変化を象徴化するのに悪い時期ではなからう。長い戦後好況をじわじわと終焉へ導いたスタグフレーションがもたらした息の根を止めるような麻痺から、資本主義世界が揺さぶられ、新しくもありません異なっているようにも思われる資本蓄積の体制へと発展していったのは、おおまかにはそれ以降のことである。1973-75年の厳しい景気後退の間に胎動をはじめ、1981-82年の等しく厳しいデフレーション

（「レーガン」不況）の間に確固たるものとなったその新しい体制は、労働過程、労働市場、生産物、そして消費のパターンに関連する驚くべきフレキシビリティによって特徴づけられる（アグリエッタ, 1989; ピオリ・セーブル, 1993; Armstrong, et al., 1984; Scott and Storper, 1986; そして Harvey, 1988 を参照）。同時にそれは、部門間・地域間の不均等発展のパターン化——まったく新しい金融システム・市場の急速な発展に促された一つの過程——において急速な移行をともなった。すべての先進資本主義国において（日本は除くかもしれない）戦後空前のレヴェルにまで失業率を押し上げた二つの過酷なデフレーションの打撃ですでに足腰の弱まっていた労働力に対して、フレキシビリティとモビリティというこれらの高揚した諸力が新しい体制の植え付けを可能にしたのである。例えば、先進資本主義諸国から新興の産業化する諸国への移行や、あるいは熟練製造業から熟練を要さないサービス業への急速な移行によって、労働者のもつ弱点や引き続く高い失業率に対する無抵抗さ、技術の急速な破壊と再構築、（もしあったとしても）ささやかな実質賃金の上昇などは打撃を蒙った。福祉国家の擁護にまじめに取り組んだ政府をもつ諸国においてさえ、政治経済的諸状況は、社会的賃金を保護する国家権力もつきかず

*ジョンズ・ホプキンス大学 **大阪市立大学・院
***大阪市立大学文学部

したのである。対抗策はいろいろとあったかもしれないが、猛烈な新保守主義の再登場に伴ってしばしば行なわれた緊縮財政が先進資本主義世界に広まるようになった。

1972年以來、こうした政治経済的変化と並行するかのごとく、文化的・知的生活に顕現してきたのは、よりラディカルなその変化の仕方である。例えば、1972年のあの「国際様式の高度なモダニティ」の破壊という実践を考えてみればよい。モダニズムはそれまでにうわべだけの社会的批判のすべてを失っていた。プロト政治的またはユートピア的プログラム（空間の変革を通してのすべての社会生活の変革）は失敗し（Jameson, 1984a）、モダニズムは合理性・機能性・効率性によって特徴づけられるフォーディズム的近代化のプロジェクトを通じた資本蓄積と密接に結びつくようになった。1972年までに、企業権力を表徴してきたモダニズム建築は窒息し麻痺していたのである。つまり、建築活動のスタグフレーションは資本主義のスタグフレーションに並行していたのだ（ヴェンチャーリ、スコット・ブラウンそしてイゼノアが『*Learning from Las Vegas*』（邦訳『ラスベガス』）を1972年に出版したのはけっして偶然ではなかったのかもしれない）。モダニティへの批判はかなり長期にわたり繰り返されてきたし（1961年に出版されたジェーン・ジェイコブスの『*The Life and Death of Great American Cities*』（邦訳『アメリカ大都市の生と死』）を想起すること）、もちろん、1960年代の革命的な文化運動がすべての分野における合理性・機能性・効率性への批判的応答として流行したということには意味もあった。しかし1973年の危機は、ポスト・モダニズムの受容と制度化を可能にするほどに、芸術と社会の関係を揺り動かしたのである。

しかしながら、「ポスト・モダニズム」はたいへん議論含みのタームである。それが「モダニズム」へのなんらかの反発を含んでいる、という認識ではほとんど一致している。しかしそのタームの意味からすれば混乱したものであるし、それへの反発というならばなおさらそうである。とはいえ、「典型的なポスト・モダニズムの人造物は、ふざけていて、多元的で、みずからを皮肉り、そして精神分裂的でさえある。つまりそれは、商業言語や商品を無遠慮に包含することで高度なモダニズムの厳格な自律性に反抗している」とい

うある種のコンセンサスはあるようだ。さらに、「文化的伝統に対するそのスタンスは一つの無関係で雑多な寄せ集めであり、その見事なまでの奥行きはなさは、すべての形而上学的な厳格さを、時にはあさましさや衝撃という野蛮な美学によってつきくずす」（Eagleton, 1987）。しかし、「人造物」がはっきりと見える建築分野においてさえ、ジェンクス（1978）のような論者がポスト・モダニズムとは何かを定義しようとしてきたが、そのタームの意味と定義はいまだに議論含みのままである。ポスト・モダニズムがポスト構造主義や脱構築などと絡み合うようになってきた他の分野では、事態はより不鮮明にさえなってきた（Huysen, 1984を参照）。したがって都市の文脈では、わたしは単純にポスト・モダニズムを以下のような思考から断絶することを意味するものと特徴づけたい。すなわち、プランニングや開発は大規模で、技術的に合理的で、厳格にかつ機能的に効率的な「国際様式」のデザインに焦点をあてるべきであるという思考、そしてまた機能から壮大なスペクタクルへの親近性にまで及ぶ土着の伝統、地方史、そして専門化した空間デザインはより折衷主義的な様式でアプローチされるべきであるという思考、からである。

この種のポスト・モダニズムは、1973年以降に現われてきたよりフレキシブルな蓄積体制へのある種の適応のようにわたしには思える。それはフレキシブルな蓄積に合致する新しい文化的態度・実践の促進において、受動的な役割というよりはむしろ創造的で能動的な役割を果たそうとしてきた。フランプトン（Frampton, 1985）のようなその擁護者たちがたとえ、ポスト・モダニズムは資本主義の至上命令への従属とならんでそれに抵抗する潜在力を含んでいる、とみなすとしても、やはりフレキシブルな蓄積への適応なのである。「ポスト・モダニズム」の制度化とヘゲモニーはそれゆえ、後期資本主義に特有な「文化的論理」の創出に基礎をおいている（Jameson, 1984b）。

こうした見取り図のもう一つの要素も考察されねばならない。資本主義とそれに連関した文化的・イデオロギイ的实践がともに大きな変化を経てきただけではなく、（はやりのもったいぶった用語をもちいれば）われわれの「言説」も同じように変化してきたのである。構造主義的解釈の脱構築、ほとんどの社会科学における経験主義理論の放棄、（政治的・知的理由によ

る) マルクス主義からの普遍的な後退、そしてリアルな表象の領域における徒勞の感覚(「他者」の不可侵性とすべての意味の「テキスト」への還元)などにより、1972年前後に起きたその変化に関するわれわれの理解の継続性感覚が維持されにくくなっている。われわれは現在と比べると、世界について異なった方法で、異なった言語をもちいて語っていた。だがここでもわたしは、たびかさなる経済危機と労働者階級の敗北を通じて達成された政治経済的变化が、文化的・イデオロギイ的实践と同様に言説にも影響を及ぼしてきた、とみなしうる一つのケースと考えている(Harvey and Scott, 1989を参照)。それはまるで時代遅れのマルクス主義的議論の響きでもあり、そのままでもある。しかしわたしは、ほこりが突然まいあがりブルーイト・アイゴアの壁が壊れ落ちるのをわれわれが見たように、思想と文化的実践の、経済と制度の、政治と関係付けの方法の全体世界がぼろぼろになるさまに、強く印象づけられざるをえないのである。

都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積

わたしが他のところで論じてきた都市空間形成の理解(ハーヴェイ, 1991; Harvey, 1985)は、資本主義の歴史地理を理解するために不可欠である。フレキシブルな蓄積という新たなシステムがそのように首尾よく植え付けられてきたのは、部分的には都市過程における変化を通してであった。またそれだけではなく、モダニズムの登場について多くの歴史家が指摘したように、美学的・文化的運動と都市的経験の変化する本質との間には密接な結びつきがある(ブラッドベリ・マクファーレン, 1990; Berman, 1982; Clark, 1984; Frisby, 1986)。したがって、フレキシブルな蓄積へと向かう政治的・経済的動向とポスト・モダニズムへと向かう文化的・美学的潮流を統合する要点ともいえるべき都市過程における変貌を考察することは、筋の通ったことであろう。

1972年以降の合衆国において、都市空間形成は他のすべてのものと同様に、その性質を劇的なまでに変えてきた。1973-75年のグローバルなデフレーションは、多くの都市地域の雇用基盤にとてつもない圧力をかけた。縮小する市場、失業、空間的制約とグローバルな分業の急速な変化、資本流出、工場閉鎖、技術や金融

の再編などが組み合わさってその圧力の根本に横たわっていた。その地理的拡散は、他の地域や国家だけにとどまるものではなかった。それは郊外を越え農村部や小都市にまで及ぶ、人口や生産の都市からの脱中心化というもう一つの側面を含み、アメリカにおけるその過程はまるで「農村の都市化」(1993, p. 129)というマルクスの予言の実現のようであった。既存の固定資本の投資と物的なインフラストラクチャーは必然的に大規模な減価に脅かされ、それゆえ社会的要求の増大する時期には多くの都市政府の不動産税の基盤と財政のキャパシティを衰えさせることとなった。連邦政府の再配分も獲得しにくくなるにつれて(これが1973年のニクソンの宣言の意味であった)、社会的消費が減じられ、それによってますます多くの[地方]政府は、自治体労働者とその地方における実質賃金を切り詰め統制するようふるまう政治・経済を強いられたのである。ニューヨーク市が1975年に法的手続き上の破綻に陥り、財政危機とラディカルなリストラが多くの合衆国都市へ波及することを予感させたのは、まさしくそのような文脈においてであった(Szelenyi, 1984; Clavel, et al., 1980; Fainstain, et al., 1986; Tabb, 1982)。

都市地域の支配階級同盟は否応なしにより競争的な姿勢を(その構成に関係なく)受容させられることになる。1960年代の都市管理に特徴的な管理者主義 managerialism は、都市的活動の主たるモチーフとしての企業家主義 entrepreneurialism に取って代わられた(Hanson, 1983; Bouinot, 1987)。「企業家的都市」の出現は、多くの次元にまたがる都市間競争の激化を意味した。その競争は四つの異なる形態に分類するのがよい、ということをおわたしは他で論じてきた(ハーヴェイ, 1991, 第8章)。つまり、(イ)国際分業における位置をめぐる競争、(ロ)消費の中心としての位置をめぐる競争、(ハ)管理・司令機能(とりわけ金融・行政力)をめぐる競争、そして(ニ)行政による再配分(合衆国では、マルクーセン(Markusen, 1986)が示したように、ここ数年間は軍事支出に重きがおかれた)をめぐる競争、である。この四つのオプションは相互に排他的ではなく、また都市地域の運不運は、グローバルな変化との関係において追求される戦略のミックスとタイミングに依拠していた。

フレキシブルな蓄積がそのように確固とした形態をとったのは、部分的にはこの激化した都市間競争を通

してである。しかしながら、その帰結は、都市の運と不均等な地理的發展のパターン化における急激なゆらぎであった (Smith, 1984 を参照)。ヒューストンやデンヴァーといった 1970 年代半ばに急成長した都市は、1981 年以後の石油価格の暴落で突然資金難に陥り、1970 年代に新たな製品と雇用をもたらしたハイテク産業の奇跡であったシリコン・ヴァレーは突然その競争力を失ってしまったが、他方でニューヨークと、いったんは疲弊したニューイングランドの経済は、拡大する司令・管理機能と新たな製造業の力さえも基礎として 1980 年代には見事に立ち直った。これに引き続くもう二つのより一般的な影響は次のようなものであった。

第一に、都市間競争が、新しくさらにフレキシブルな労働過程をより簡単に植え付けることができるような諸空間を開き、また 1973 年以前のケースよりははるかにフレキシブルな地理的モビリティの趨勢への道程を切り開いてきた。例えば、良好な「ビジネス環境」への関心は、経済發展を惹きつけるために都市政府にあらゆる種類の措置 (賃金統制から公共投資にいたるまで) を取らせてきたが、その過程で企業の移転コストは減じられた。今日の誇らしげな「官民協力体制」のほとんどが、結局のところ、労働者階級や貧困層に対する地域的な集約的消費の犠牲の上に立った、都市部の裕福な消費者や企業、そして強力な支配機能に対する補助にほかならない。第二に、都市政府は、消費や文化の中心として自らの都市をより魅力的にするために、イノベーションや投資を推進するようにせきたてられてきた。このようなイノベーションや投資 (コンベンション・センター、スポーツ・スタジアム、ディズニー・ワールド、ダウンタウンの消費者の楽園など) は、すぐさま他のところで模倣された。都市間競争はこうして、ライフスタイル、文化形態、生産物、そして政治や消費者を基盤にした、都市的イノベーションのかえる跳びのような展開を生みだし、またそれらすべてがフレキシブルな蓄積への移行を積極的に促進してきたのである。そしてここに、都市文化におけるポスト・モダンティへの移行の秘密の部分がある、とわたしは主張したい。

この結びつきは、激しい都市間競争が繰り広げられている今日の合衆国都市の内部空間のラディカルな再編のなかに見出すことができる。しかしながら、わた

しは、都市的な道具立て settings における空間的实践の階級内容に関する一般的な特徴の説明からはじめたい。

都市的な道具立てにおける空間的实践の階級内容

どのような社会においても空間的实践は巧妙さと複雑さで満ちている。空間的实践は資本主義下での資本の蓄積や階級関係の再生産と無関係ではないゆえ、それは社会的な紛争・闘争のたゆめぬ舞台となる。空間を統御し生産する力をもつ人びとは、彼ら自身の力を再生産し強化するためにきわめて重要な道具性を所有する。社会を改変するいかなるプロジェクトも、したがって、空間的实践の変革という複雑な難問を理解しなければならぬ。

わたしは、空間的实践の「グリッド」(第1表)を作成することで、多少なりともその複雑さを捉えようと思う。左側の縦軸に、わたしはルフェーブルの『*The Production of Space*』で同定された三つの次元をならべる (Lefebvre, 1991)。

1. **物質的な空間的实践**は、生産と社会的再生産を保証する空間のうちに、そして空間にまたがって現われる物理的・物質的なフロー、移動、相互作用に関係する。
2. **空間の表象**は、日常の常態感覚からの観点、もしくは空間的实践を論じるアカデミックな諸学(工学、建築学、地理学、プランニング、社会生態学など)の往々にしてわかりにくいジャーゴンの何であれ、そのような物質的实践が語られたり理解できるようにする、記号と意味、つまりコードと知のすべてを包括する。
3. **表象の空間**は、空間的实践の新しい意味または可能性を引き出す社会的発明(コード、記号、そして象徴空間・特定の建造環境・絵画・博物館のような物質的構築物)である。

ルフェーブルはこの三つの次元をそれぞれ、**経験されるもの**、**知覚されるもの**、そして**想像されるもの**、と特徴づけている^{註1)}。彼はそれらの間の弁証法的関係を劇的な緊張の支点であるとみなし、それを通じて空間的实践の歴史を読むことができるとする。しかし、

第1表 空間的実践のグリッド

| | 近接性と遠隔化 | 空間の領有と利用 | 空間の支配と管理 |
|-------------------|---|--|---|
| 物質的な空間的実践 (経験) | 商品・貨幣・人口・労働力・情報などのフロー、輸送・通信システム、市場・都市の階層性、集積 | 都市的建造環境、都市の社会空間やその他の「なわぼり」の指定、伝達・互助の社会的ネットワーク | 私的土地所有、国家・行政による空間分割、排他的なコミュニティ・近隣住区、排他的なゾーニングと社会的管理のその他の形態（警備・監視） |
| 空間の表象 (知覚) | 距離の社会的・心理的・物理的な尺度、地図作製、「距離の摩擦」の諸理論（最小努力の原則、社会物理学、財の到達範囲、中心地理論や他の形態の立地論） | 個人的空間、占有された空間のメンタル・マップ、空間的階層性、空間の象徴的表象 | 禁じられた空間、「領域から発せられる至上命令」、コミュニティ、地域文化、ナショナリズム、地政学、階層性 |
| 表象の空間 (想像) | 「メディアはメッセージである」、空間的処理の新しいモード（ラジオ、テレビ、映画、写真、絵画など）、「嗜好」の拡散 | 大衆的スペクタクル・街頭デモや暴動、大衆スペクタクルの場所（街路・広場・市場）、図像と落書き | 組織化されたスペクタクル、モニュメント性と構築された儀礼空間、象徴的障壁と象徴資本の信号 |

その関係づけには問題がある。「俗流マルクス主義的」立場では、物質的な空間的実践が直接的に空間の表象と表象の空間の両方を決定する、ともってもらしく考えるだろう。マルクスはそのような見方をとらなかった。彼は『資本論草稿集』（1993, pp. 479-483）のなかで物質的生産力として知を描き、『資本論』（1983）のあの有名なくだりのなかで次のように書いている。

「もっとも拙劣な建築師でももっとも優れたミツパチより最初から卓越している点は、建築師は小室を蠅で建築する以前に自分の頭のなかでそれを建築しているということである」（pp. 304-305）。したがって、表象の空間は空間の表象に影響するだけではなく、空間的実践との関連で物質的な生産力としてふるまう潜在力をもっているのである。

しかし、経験されるもの、知覚されるもの、そして想像されるものの関係は因果的にではなくむしろ弁証法的に決定される、と論じるとあまりに多くのことが曖昧なままとなる。ブルデュー（Bourdieu, 1977, pp. 83-84）が一つの整理を提供してくれる。彼は、「知覚・認識・行動のマトリクス」が、「客観的構造」の物質的経験から、それゆえ「当の社会構成の経済的基盤」から生じる「最終審級において」（エンゲルスの有名なフレーズ）存在しながら、どのようにそれと全く同時に、「無限に分散した仕事を成し遂げるために」

フレキシブルに作用することができるのかを説明する。しかしながらブルデューは、客観的諸構造はそれ自体に主体的行為から独立して自律的に発展する力が賦与されている、という誤った推測をなさずに、「客観的諸関係がたしかに卓越している」ことを受け入れている。

その調停の連関が「ハビトゥス」という概念によって与えられる——それは、「実践を生産」する「規則に適った即興によって持続的に組み立てられる産出原理」（p. 78）であるが、翻ってそもそもハビトゥスの産出原理を生産した客観的諸条件を再生産する傾向がある。その循環的（累積的でさえある？）因果関係は明白である。しかしながら、ブルデューの結論は、想像されるものの力が経験されるものに及ぼす制約に関してのかなり際立った叙述である（ブルデュ, 1988, p. 87）。

まさしくハビトゥスとは、歴史的・社会的に状況づけられたハビトゥス生産の諸条件を限界としてもつ生産物——思考、知覚、表現、行為——を、（制御を受けながらも）全く自由に産み出す無限の能力なのだから、ハビトゥスが保証する自由、条件づけられ、かつ条件つきの自由は、初期条件つきの機械的な単なる再生産からも、予見できない新奇なもの創造からも、等しくかけ離れたものである。

わたしはこの理論化を受け入れ、後半部でそれを使用して考察してみたい。

グリッド（第1表）の最上欄に、わたしはより慣習的な理解にならない、空間的実践の他の三つの位相をならべる⁴²⁾。

1. **近接性と遠隔化**は、人間のかかわる事象における「距離の摩擦」の役割を述べている。距離は人間の相互行為に対しては障壁でありまた防御でもある。それはいかなる生産および再生産のシステム（とりわけ、精巧な社会的分業、取り引き、そして再生産機能の社会的差異化に基礎をおくもの）に取引費用を課す。遠隔化（参考：Giddens, 1984, pp. 258-259）とは単純に、社会的相互行為をうまく調節するために空間の摩擦がどれくらい克服されてきたかの尺度である。
2. **空間の領有**は、個人や階級あるいはその他の社会集団がどのようにして空間を使用し占有するのかを検討する。システム化され制度化された領有は、社会的団結の領域的に有界化された形態の生産を含意するやもしれない。
3. **空間の支配**は、個人または有力な集団が、距離の摩擦ないし彼ら自身、あるいはその他の人びとが空間を領有する手段のいずれかをめぐって完全な管理を行使するために、どのようにして空間の組織化と生産を支配するのかを考えるものである。

空間的実践についてのこの三つの次元は、相互に独立しているわけではない。距離の摩擦は空間の支配と領有についての理解に暗に含まれもするが、その一方である特定の集団（言ってみれば街路の一角に居すわるギャング）による永続的な空間の領有は、結局のところ、事実上のその空間の支配へといたる。さらに、空間を支配する試みは、それが距離の摩擦の縮減を必要とする限りにおいて（例えば、資本主義の「時間による空間の絶滅」）、遠隔化というものを変えてゆく。

空間的実践のこのグリッドがわれわれに語っていることそれ自体に重要なものはない。空間的実践は社会諸関係の構造を通してのみ社会生活におけるそれ自身の有効性を引きだし、またその構造のなかで作動するようになる。資本主義の社会諸関係のもとで空間的実践は階級的意味合いを吹き込まれるのだ。しかしながらこう述べることは、なにも空間的実践が資本主義の

派生物である、と言っているのではない。空間的実践は固有の意味合いを帯びており、階級、ジェンダー、あるいはその他の社会的実践の行為主体を通してこれらの意味合いがつき動かされ、空間が特定の方法で使用される⁴³⁾。したがって、資本主義的な社会的諸関係・至上命令（資本の蓄積）という文脈に定位するならば、このグリッドは現在の空間的実践の領野に広まっているその複雑さを多少なりとも解きほぐすのに役立つだろう。

しかしながら、わたしがこのグリッドを準備した目的は、そのなかのそれぞれの位置をシステムティックに探究するためではない。そのような考察はかなり興味深いことではあるのだが（そしてわたしは例示のためにそのなかへいくらか論争となりうるような位置付けを書き込んでおいた）。わたしの目的は、ここ20年の間に現われてきた階級内容や空間的実践の性質のラディカルな変化を特徴づける方法を見出すことである。例えば、都市の内部空間を再編成する圧力は、フレキシブルな蓄積の状況のもとでかなりのものとなってきた。都市中心部の活力は再び強調されてきており、都市生活の質（ジェントリフィケーション、消費の場、洗練されたエンターテインメント）や都市内の公的・私的空間をめぐって高まる社会的管理といったテーマは、広範に重要な意味を帯びてきた。しかし、都市過程は、社会的賃金が上昇しえない状況のもとで増大する貧困や失業にも対処してゆかねばならなかった。ここでも空間的実践は、ゲットー化への逆戻り（もちろん、シビアにつぶされたり、いわんや打ちのめされた実践ではけっしてない）や、ホームレスがさまよい、精神分裂病患者や退院した精神病患者がうろつくような新しい諸空間の出現、そして貧困者が新しくもあり試練にも耐えた生き残り戦略を実践することを通じて、部分的には管理の強化へと変化してきたのである。ならばわれわれは、階級の分極が空間化する傾向をもつこうした変化や紛争すべてを、どのようにして意味あるものにしたらよいか？ さらに、すべての都市地域にますます見出されるようになった、分化され、抑圧され、貧困化した人びとに空間的力を付与するという問題に焦点をあてる方法はあるのだろうか？

階級の実践とコミュニティの構築²⁾

異なる階級は、ラディカルに異なる方法で領域とコミュニティの感覚を構築する。この基本的な事実はしばしば、政治的または経済的状況などがどうであれ、すべての人間存在はおおよそ似たような人間コミュニティを構築するという理想的—典型的で普遍的な傾向があるとア・プリオリに仮定する理論家たちには見落とされる。現在の都市空間形成の条件のもとでのコミュニティ構築に関する階級的な行為主体の研究は、本質的に類似する空間的実践がどのようにしてラディカルに異なる階級内容を持ちうるのかを描いている。

例えば、もっと近くで階級実践を眺め、その階級実践を通してコミュニティが都市的な道具立てのなかで典型的に構築されるさまを見てみよう。われわれはここで、ブルデューが主張する知覚・思考・行為のフレキシビリティおよび適応性のすべてと遭遇する。しかし、低所得で力を持たない階層と裕福で力を持つ階層のコミュニティ構築におけるコントラストは、やはり実際のところ際立っている。

空間を克服する手段、ゆえに統御する手段を欠いている低所得の人びとはいつも、大抵空間に捕らわれている自分を見つけだしてしまふ。(住宅のような)再生産の基礎手段を所有することさえも制限されているゆえに、空間を支配する主な方法は不断の領有を通してである。交換価値は乏しく、日々生き残るための使用価値の追求が社会的行為の中心となる。このことは頻繁にモノおよび対人的取り引きがあり、コミュニティがかなり小規模に形成されていることを意味する。このようなコミュニティ空間で、使用価値は互助・互奪が混ぜ合わされながら分有され、私的・公的空間の双方に緊密ではあるがしばしば紛争も引き起こすような個人間の社会的結合が創り出される。その帰結はしばしば、場所や「なわばり」への熱烈な愛着や、境界線に対する厳しい感覚となる。というのも、積極的に領有することを通してのみ空間をめぐる管理が保証されるからである。

管理がうまくゆくには、望まれぬ要素を排除する権力が前提となる。そのようなコミュニティ構築の過程に、民族、宗教、人種、地位をめぐる差別は微妙に調整されながら、しばしば役割を負わされる。さらに政治的組織化は特有の形態、つまり一般的には、政治的な反抗の文化として、ごく通常的な政治ルートを通すことに対する敵意となって現れる。国家は、彼らが管理

できるそして彼らに利益をもたらす機関としてよりは、むしろ(警察、教育などにおいて)抑圧的管理の機関として大いに経験されることになる(Willis, 1977を参照)。クレンソン(Crenson, 1983)は、参加型の政治組織の展開は弱く、ブルジョア型の政治は日々の生存に必要な使用価値の調達とは無関係なものと理解されていると見なしている。にもかかわらず国家がそのようなコミュニティに介入するのは、それらが失業者予備軍のなくてはならない貯蔵庫であり、(売春から結核にいたるまでの)あらゆる種類の伝染性の社会病理が蔓延しうような欠乏の空間であり、かつそれらは社会的結合の通常過程の外側に置かれているからしてまさしく危険に見える空間だからである。

このことを、空間的モビリティと再生産の基礎的手段(住宅、自動車など)の所有を通して空間を統御できる富裕な集団の実践と対照してみよう。もとより生活を維持するための充分な交換価値に恵まれている彼らは、コミュニティが供する生存のための使用価値に依存することはない。コミュニティの構築はそれゆえ主として交換価値の維持あるいはそれを高めることに連動する。使用価値は、近接性、好み、色調、美的嗜好、そしてある種の「価値づけられた」建造環境の占有をともなう象徴・文化資本の事物に関わってくる。対人関係は街頭のレヴェルでは不要であり、空間への支配が不断の領有を通して保証される必要もない。金があればコミュニティへのアクセスは提供され、それ以外の理由で排除されなくてもすむ(民族やさらには人種による居住分化は、ある人が得る所得規模が上昇すると弱まる傾向にある)。境界は拡散的でフレキシブルであり、主として個々の不動産価値に影響しうる外部効果の空間的な場に従属する。コミュニティ組織は外部効果に注意を払いながらコミュニティ空間の「土地柄」を維持すべく形成される。国家は、特異な状況(「有害」施設の立地、ハイウェイの建設など)を除けば、安全を保証し望まれぬものを閉めだすのに役立つ、基本的には有益で管理可能なものとみなされる。

異なる物質的状况から示差的な空間的実践およびコミュニティ構築の過程が——示差的な文化的実践やイデオロギー的性質をともなう——生起する。経済的圧迫や社会—政治的支配の状況によって、他の階級状況のもとで典型的に見出されるものとはまったく異なる

る種類の空間的実践やコミュニティ形成のスタイルが生みだされる。

インフォーマル化・象徴資本の生産・ スペクタクルの動員

フレキシブルな蓄積は、コミュニティ生産の諸過程を修正するほどに、階級構造や政治経済的可能性に深く影響してきたが、他方では空間的実践の階級内容の重要性を再度強調した。わたしはこの変化を三つの側面から概観してみたい。

貧困とインフォーマル化

1972年以降、合衆国は都市貧困者の急激な増加を経験してきた。この貧困層の構成もまた変化してきた。脱工業化によって街頭に投げ出された失業ブルーカラー労働者や、貧窮した農村・地域経済から追い出され、あるいは第3世界から流入する人びとは、マルクスが労働者階級の「病院」と呼ぶところのその頂きに積み上げられ、都市のなかでの自活に放っておかれた。いくつかの事例では、ひとつの支配的な地元での雇用源に結びついていた特定の都市コミュニティは、工場がたった一つ閉鎖しただけでそっくり貧困状態に追い込まれた。また別の事例では、母子家庭のようなとりわけ弱い集団が窮乏化し、それによって貧困が女性に集中して現れるような地区が生じてきた。新保守主義は、財政緊縮を経済的必然というよりは政治的美徳に仕立て上げ、同時に公共サービスの流れ、つまり多くの失業者や貧困者の生活支持機構に切り込んできたのである。

ほとんど所得のない人たちにあって、都市的な道具立てのなかで争い生き抜いてゆく術を学ぶには時間がかかる。競争・互奪・互助のバランスは必然的に、低所得人口のなかで変化してきた。貧困の増大は、逆説的にも、それに対処するより積極的ないくつかのメカニズムの力を弱体化させた。しかしここにはもう一つの劇的な反応——アメリカ諸都市においては「インフォーマル部門」（麻薬の密売、売春というような不法な行いや、合法的なサービスの取り引きに集中している）として知られるものの興隆——もあつたのである。たいていの観察者（Castells and Portes, 1987を参照）は、これらの諸実践の範囲と形態が1972年以降

に発展したと論じる。さらに、同一の現象がヨーロッパ諸都市で観察されたことから、先進資本主義諸国全体の都市過程が第3世界の都市的経験にかなり近くなったとみなされた（Redclift and Mingione, 1985）。

インフォーマル化の性質と形態はかなり多様である。それは商品とサービスの局地市場を見つける機会、労働力の予備軍の質（その技術と適性）、ジェンダー関係（女性はインフォーマル経済の組織においてかなり顕著な役割を果たすことによる）、小規模の企業家的技術の存在、そしてしばしば法の[規制]外にあるようなさまざまな行いを許容する公共機関（組合のような規制・監視権力）に依拠して変化する。

低所得コミュニティは、まず第一に、ほとんどあらゆる種類の生活の資を見つけたさねばならないというこの時代の強力な圧力のもとにあって、労働力の莫大な予備を生じさせる。

政府による規制が緩和され労働組合が弱体である状況下では、財やサービスの新しい種類の生産が、時にはコミュニティの外側から組織され、また時には低所得のコミュニティ自体から企業家によって組織されることがある。例えば内職は、女性が同一の空間で育児と生産労働をいっしょにすることを極めて明快に示し、他方で企業家に間接費（機械、照明など）を節約させる。苦汗工場やサービスのインフォーマルな供給は、1970年代にニューヨークやロサンゼルスを経済に不可分の側面として起ち現われはじめ、今では合衆国の都市システム全体において重要になってきた。これらは、低所得コミュニティの伝統的な互助システムがますます商品化してゆくことに並行していたのである。子守り、洗濯、掃除、修繕、そして日雇いなどの親切心から交換されてきたものが、今では往々にして企業家的基盤のうえで売り買われている。

結果として、多くの低所得コミュニティの社会的諸関係は、労働過程における（とりわけ女性の）過度のそして時には驚くべき搾取を生みだしながらかなり企業家的なものになってきた。このようなコミュニティに流れる所得は増大してきたが、伝統的な互助システムがその犠牲となり、コミュニティそのもののなかに社会階梯が強く植え付けられた。こうしたコミュニティから流出する価値もまた実質的には増大していたのである。このことで、都市開発という局所的なダイナミクスを多くの者が驚きをもって見るようになり、か

つインフォーマル化の許容や受容、さらには奨励を支持する議論が生ずるにいたり、そこから民間の企業家的活動がつねに経済成長と成功への道であるとする——それがまるで選別された少数ではなく貧困者すべての問題を解決してしまうかのような——新保守主義的な議論に信用を与えてしまったのである。それでもやはりインフォーマル化の成長——およびそのような行いが許容される規制のない都市空間の登場——は、フレキシブルな蓄積という新しい体制に完璧に合致した現象なのだ。

象徴資本の生産

裕福な人びとの消費の熱烈な追求は、フレキシブルな蓄積体制のもとで生産物の差別化をより強調することへと導いた。結果として生産者は、大量生産による規格化された蓄積というフォーディズム体制のもとではさほど必要ではなかった差異化された嗜好と審美的な好みの範囲を探求するようになった。そうすることで彼らは、資本蓄積の強力な側面、すなわちブルデュー（ブルデュー、1989、1990; Bourdieu, 1977, pp. 171-197）が呼ぶところの「象徴資本」の生産と消費を再度強調してきたのである。このことは、高所得集団が居住する都市空間の生産と改変に重要な影響を及ぼした。

「象徴資本」をブルデューは「趣味を証し立てる奢侈財の蓄蔵とその所有者の品位を確保する」（ブルデュー、1988, p. 221）のもと定義する。そのような資本は、もちろん貨幣資本が転形したものであるが、「それが資本の『物質的』形態から生じるという事実を隠すゆえに、そしてただそれゆえに適切な効果が生みだされるのであり、それはまたつまるどころその効果の源泉でもある」（Bourdieu, 1977, p. 183）。物神性を含み込まれているのは明らかであるが、ここでは意図的に文化と嗜好の範囲を通して、経済的品位の現実的基盤を隠すためにもちいられている。それゆえ「最も確実なイデオロギー効果とは、実行されるためには言葉を必要とせず、自由放任と共謀的沈黙を必要とする効果」（ブルデュー、1988, p. 220）であり、象徴資本の生産はイデオロギー的諸機能を果たすのだ。というのも、象徴資本が「既成秩序の再生産と支配関係の永続」に貢献するメカニズムは、「依然として隠されたままであるからである」（ブルデュー、1988, p. 220）。

ブルデューの理論化を、上流階級のコミュニティおよび彼らの建造環境の生産に関係づけることは有益である。それはわれわれに、ジェントリフィケーションの物質的諸過程、（現実の、想像の、あるいは単に雑多な寄せ集めとして再創出された）「歴史」および（これまた、現実の、想像の、あるいは単に生産者によって販売するためにパッケージ化された）「コミュニティ」の回復、粉飾の必要性、そして社会的品位のコードおよび象徴として機能する装飾（参考：ジンメル、1994; Firey, 1945; Jager, 1986）について多くのことを語ってくれる。なにもわたしは、このような現象が新しいということを主張しているのではない——それらは資本主義的都市空間形成のその開始当初からの際立った特徴であり、もちろん、より古い社会秩序からきた品位の残響以上のものをもっている。しかしそれらは、今までこうしたことを否定してきた人びとの間にひろまったこともあって、1972年以來、さらなる重要性を帯びるようになってきた。フレキシブルな蓄積は1960年代の文化的不満をうまく利用したが、そのことは象徴資本の獲得機会をほとんど与えなかった規格化された蓄積と大衆文化の拒絶を意味していた。政治経済的危機の程度に応じて生産物を差別化する探求が強まり、象徴資本を欲する抑圧されていた市場の欲望が、建造環境の生産を通じてとらえられるようになる（Smith and Lefavre, 1984）。もちろん、ポスト・モダニズムの建築家が満ちそうとした欲求は、まさしくこの種のものであった。ヴェンチャーリら（1978, p. 206）は、「南北戦争以前の大邸宅ではなくて、広大な空間がもはやない、より小型の郊外住宅に住む中流階級の人びとにとって、自己の存在の証は、家屋の形態の象徴的扱いや、開発業者の手になるいくつかの様式（たとえばスキップ・フロア型のコロニアル風）とか、住人の手で後からつけ加えられた様々な象徴的装飾などによらざるをえない」と述べる。

しかしながら、象徴資本は嗜好の変化による減価や増価に動かされやすい。もし象徴資本が隠れた支配力をもっているならば、権力関係そのものは嗜好の突然変異に対して脆弱になる。生産者と消費者のたくらみとの間の競争が嗜好を不安定にさせるゆえ、ファッションをめぐる闘争は都市シーンのなかで一定の重要性をもつことになる（例えば、ズーキン(Zukin, 1982)のロフト・リビングに関する研究を参照）。支配の力

と象徴資本を貨幣資本に変換する能力は、都市過程の文化的ポリティクスに埋め込まれるようになる。しかしこのことは、都市過程における空間の支配において、フレキシブルな蓄積体制のもとではますます文化の面が優勢になってくることをも意味する。どんな種類の支配であろうとも、支配される側に暴力で訴えるといった可能性を潜在的にもつかぎり、ここにまた紛争の潜在的領域があからさまに開かれているのである。

スペクタクルの動員

「パンとフェスティバル」は、不穏な平民を社会的に平定する古代ローマの処方箋であった。その処方箋は、例えば第2帝政パリを通じて資本主義文化にもひきつがれ、そこではフェスティバルと都市スペクタクルが階級闘争によって引き裂かれた社会の社会的管理の道具となったのである (Clark, 1985)。

1972年以來、都市スペクタクルは、1960年代のカウンター・カルチャーのイベント、反戦デモ、街頭暴動、そしてインナーシティの反乱とは異なるものに形を変えてきた。それは、失業と貧困が進行し、階級の分極化という客観的条件が進行してきた状況下のブルジョア支配のもとで、コミュニティ統合の象徴および道具として捉えられてきた。この過程の一部として、モダニズム的なモニュメントの希求——既存の資本主義的秩序の永続性・権威・権力の伝達——が、一時的で、ディスプレイされた、そしてうつろいやすい、しかし参加する楽しみの感覚を備えたフェスティバルとスペクタクルの建築を探索する「公的な」ポスト・モダニズム様式によって、挑戦されてきたのである。商品のディスプレイはスペクタクルの中心部分となり、アメリカ全土に突如現われたボルティモアのハーバー・プレイス、ボストンのファナル会館、そして多くの囲われたショッピング・モールのような親しみやすく安全な空間で、群衆はディスプレイやお互いを見つめあいながら群がる。すべての建造環境さえもが都市スペクタクル・ディスプレイの中心的存在となったのである。

その現象は、わたしがここで提示する以上により綿密に吟味するに値する。もちろんそれは、脱工業化の埋め合わせに消費者の金をつぎこもうという都市戦略に合致する。そのまぎれもない商業的成功は、部分的には、暴力や政治的扇動から守られた安全な空間にお

いて購買行為がスペクタクルの快楽に結びつくという、そのあり方にもとづいている。ボルティモアのハーバー・プレイスは、ベンヤミン (1995, pp. 325-356) が、「商品という物神への巡礼の場所」 (p. 338) たる万国博覧会に結びついたフェスティバル感覚を備える19世紀パリのアーケードに帰する、ブルジョア的美徳すべてを合成したものである。ドゥボール (1993) はさらにそれをおし進める。つまり、「スペクタクルは現代における貨幣の発展した補充物であり、そこでは、社会全体のありうる姿、また、社会全体がなしうることと一般的に等価なものとして、商品世界の全体が一括したかたちで姿を現す」 (p. 47)。スペクタクルが「眼差しの濫用と虚偽意識の場」となるにつれて、それは「統合の道具」としてその姿を現すこともありうる (p. 13)。ボルティモアでシェーファー市長と彼の後ろで幅をきかせた都市階級同盟は、意識的にハーバー・プレイスのスペクタクルをまさにその方法で、つまり階級に分断され人種で分化された都市の、想像上の統合の象徴として利用してきたのである。プロ・スポーツ活動やロザンゼルス・オリンピックのようなイベントは、また違ったかたちで分断された都市社会において同様の機能を果たしている。

フレキシブルな蓄積体制のもとで、都市生活はますます「スペクタクルの膨大な蓄積」 (ドゥボール, 1993, p. 12) としてその姿をあらわにしてきた。アメリカのダウタウンは、権力・権威・企業支配のモニュメントの意味だけを伝達するようなことはなくなった。その代わりに、スペクタクルとプレイの思考を表現している。フレキシブルな蓄積に付随してきたポスト・モダン都市文化への侵入チャンスが部分的に仕立て上げられたのは、まさにこのスペクタクルの領域であり、そして階級意識や階級実践への対抗が明らかにすべきことは、そのような媒介するイメージの文脈のなかにある³⁾。しかし、ドゥボール (1993) は、スペクタクルは「適所に安全に最後まで据えられるイメージではけっしてなく、それはつねに、他者と競合し差異の抵抗やときには頑強な社会的実践の形態に遭遇する世界に関する一つの説明である」とする。

フレキシブルな蓄積のもとでの都市ストレス

フレキシブルな蓄積はすべての都市経済に重大な影

響を及ぼしてきた。多くの（とりわけ「官民協力体制」を強調した）都市政府でますます幅をきかせてきた企業家主義がさらにそれを強める傾向にあり、新保守主義とポスト・モダニズムの文化的潮流がそれに付随した。発展をとらえてゆくためにますます増える希少資源の利用とは、都市の金持ちや権力者を町にひきとめておくための便益を供出するために、貧困者の社会的消費を無視することにほかならない。ニクソン大統領が1973年に都市危機の終結を宣言したときに彼が示唆したのは、まさしくこの方向転換だったのだ。もちろんこのことは、都市ストレスが新たな形態へと変位することを意味した。

都市におけるその内面的適応は、フレキシブルな蓄積を促進・助長する役割も同様に果たした。例えば、貧困層は生き残るために「インフォーマルな」経済手段を採用することで、いっそう企業家的にならざるをえなかったのである。窮乏がますます進行する状況下で強まる生存競争は、空間を支配する力がほとんどなく、政治的統合の通常過程に関わる力を往々にして剥奪された都市コミュニティにおける伝統的な互助メカニズムの深刻な侵蝕を意味した。多くの空間が他者による介入や占有に脆弱となったまさにその時に、共同体の団結と領有の互助的パターンを通じた空間を支配する力が失われたのであった。伝統的職種で見られる労働者の失業の増大と、金融サービスやスペクタクルの組織にもとづいたダウNTOWN再生に誘発された雇用成長との間には、緊張が生じた。新しくそして相対的に裕福な専門管理職集団が1960年代にモダニズムへの文化的不満から登場し、建造環境、生活の質、そして象徴資本の支配における生産の差別化を追究しながらインナーシティ都市空間のあらゆる地区を支配するようになった。「歴史」と「コミュニティ」の回復は、建造環境の生産者にとって本質的な販売手口となった。こうしてポスト・モダニズム様式への転換が制度化されたのである。

そのような状況にはつきものの、重大な社会的・空間的ストレスがある。まず、（驚くほど顕著に富の集積する島々を取り囲む都市貧困の大波に象徴される）ますます進行する階級の分極化はもともと危険なものであり、貧困者にとって可能なコミュニティ構築の手段が与えられるならば、それはますます高まる人種的、民族的、宗教的あるいは単に「なわばり」的な緊張の

舞台もセットする。コミュニティの空間性を規定する根本的に異なる複数の階級メカニズムが衝突しあい、さらには都市の多様な空間の領有と管理をめぐるゲリラ的闘争の口火が切られることになる。都市暴動の兆しは、1960年代に経験された大規模なそれとは違った形ながら大きくなっている。貧困者になんらかの互助コミュニティの構築を可能にさせる過程が崩壊したことも同じく危険であり、というのもそれは個人的なアノミーや疎外の増大、そしてそこから派生するあらゆる対立を引き起こすからである。インフォーマル部門の活動を通して「成功する」少数は、うまくいかない大多数を埋め合わせることはできない。社会的地位のもう一端での象徴資本の追求は、政治経済的緊張に文化的次元を導入する。この緊張は階級間の反目をあおり、低所得者層をさらに疎外するような国家介入を促進する（わたしは、例えば、高級化する近隣地区で街頭の若者が受けるいやがらせを想起している）。スペクタクルの動員はそれを統合する効果をもつものの、それは統合にとっては壊れやすく不確かな道具であり、また消費者をして「幻想の消費者」（ドゥボール、1993、p. 46）とならしめるほどに、自らのうちに固有の疎外を内包する。管理されたスペクタクルとフェスティバルはそれとしても、騒擾と革命も「人民のフェスティバル」になりうるのだ。

しかしさらなる矛盾がある。激化する都市間競争は、まずフレキシブルな蓄積への移行の影にある過剰蓄積の問題を緩和するというよりは、むしろそれに貢献するような社会的に無駄な投資を生む（Harvey, 1989）。簡単に言えば、コンベンション・センター、スポーツスタジアム、ディズニー・ワールド、そしてハーバー・プレイスでいったいどれだけ成功できるのだろうか？ 成功はしばしば短命であるし、あるいは他の場所で競争相手や代替施設が出現するので、成功するかどうかには議論の余地がある。ショッピングモールから文化施設にいたるまでのあらゆるものへの過剰投資によって都市空間に埋め込まれたその価値は、減価を受けやすくなっている。ダウNTOWNには金融・土地不動産サービス業に雇用されている人びとのために、日々ローンを処理し土地不動産取引をする人びとがいるが、こうした金融・土地不動産サービス業の急速に伸張する雇用の上に打ち立てられたダウNTOWNの再興は、個人、自治体、政府の多額の負債

に頼っている。これがうまくいかなくなれば、ブルーイット・アイゴーの爆破が象徴した以上の破壊的な結果を招くことになるだろう。テキサス、コロラド、そしてカリフォルニアにおいてさえ起きた銀行の倒産ラッシュ（それらの多くは土地不動産への過剰投資のせいである）は、都市再開発への深刻な過剰投資があったことを示している。

端的に言って、フレキシブルな蓄積は、ますます強まる都市階級間対立の社会的・空間的分極化と同様に、都市投資が非常にもろく崩されるパターンができあがっていることとも関連しているのだ。

政治的応答

ブルデュー (Bourdieu, 1977, pp. 164-165) は、「すべての既存の秩序は、それ自体の恣意性の中立化を産出する傾向にある」と述べる。そうするための「もっとも重要でありかつ見事に隠されている」メカニズムは、「客観的機会とエージェントの願望との弁証法であり、そこから一般的にはリアリティの感覚と呼ばれる限界の感覚が生起し」、その感覚は「既存の秩序に対してもっとも根深く執着する基盤である」。(知覚され想像される) 知はそれゆえ、「それ自身を再生産するための社会権力の不可欠な要素となる」。「リアリティ——とりわけ、社会的リアリティ——の構築という原則を課す象徴権力は、政治権力の主たる次元である」。

これは鍵となる洞察である。それは、もっとも批判的な理論家さえもがあまりに安易に「既存の秩序に対する執着」を再生産することになってしまうのかを説明するのに役立つ。それは社会諸関係のラディカルな移行に先行しての文化のラディカルな移行、ゆえに建築の実践がラディカルに変化することは不可能だとするタフーリ (1981) の (建築におけるアヴァン・ギャルド主義とモダニティの歴史にもとづいた) 結論を説明する。過去からのラディカルで解放的な断絶としてのポスト・モダニズム (あるいはラディカルな個人主義か現代実践のいくつかの他の側面) を近年になって採用してきた者たちにとって、この洞察は彼らを懐疑的にさせる。ポスト・モダニティはフレキシブルな蓄積の文化的装い以外のなにものでもない、という明白な証拠がある。「創造的破壊」——資本主義的モダ

ニティの要点——は、今までと同様に日々の生活の中心そのものである。したがって、難しいのは、フレキシブルな蓄積の状況のもとで資本主義が現在演じる様相の特殊な形態に回答しながらも、資本主義一般における異同のない不変の真実に対し政治的にどのように回答すればよいのか、ということである。それゆえ、この観点から、わたしはいくらか控え目な提案を試みよう。

まず、抵抗と権限付与の点に関する現在の諸過程の裂け目を探究してみよう。あらゆる場所の文化的連続性がフレキシブルな蓄積によってひどく脅かされているまさにこの時期に、空間や場所の質への文化的関心とともに起こった分極化や分散化によって、コミュニティ・場所・宗教の政治を新たな観点から展開できるような政治的風潮が創り出されてきた。フランプトン (Frampton, 1985) がグローバルな資本主義のもつ同質化する諸力に抵抗する地域にねざした建築を推奨し、ロッシ (1993) が近隣地区の伝統や集合的記憶の連続性を表現する建築を追求するのは、まさにこの種の緊張から生じるものである。ポスト・モダニティの文化的テーゼは、明らかに、貧困者や搾取されている人びとにより多くの権限を付与するためのラディカルな解釈へと開かれている。しかし、それは「創造的破壊」に比べれば取るに足らないものであり、例によってフレキシブルな蓄積はその「創造的破壊」でもって都市構造に傷跡を残すのだ。

フレキシブルな蓄積は社会変化への新たな途をも開く。空間的分散は、もっとも遠く離れた地方のもっとも小さな都市でさえ新しい活動を惹きつける機会がもてるという大いなる地理的平等性を意味する。都市階梯における地位はさほど重要ではなくなり、大都市は本来備わっていた政治経済的な支配力を失ってきた。新しい活動をうまいこと惹きつけた小都市は、しばしばその地位を著しく改善してきた。しかし、競争という冷たい風がここでも激しくふきつける。最近得られた活動でさえ維持するのは難しいことがわかる。多くの都市がこれによって得るのと同じくらいのを失っているのだ。労働市場の激変は伝統的な組合の力もつきくずし、かつて移住、雇用、自営の機会を与えられなかった住民層にその機会を与えはじめた (ただし女性、新住民、ゲットー化したマイノリティは低賃金や労働条件の悪化に見舞われるというかなり競争的な

環境におかれるが)。フレキシブルな生産は、わずかな労働者管理で労働組織の協同形態の可能性を切り開く。ピオリとセーブル(1993)はこの論点を強調し、これをまったく新しいかなり民主的な産業組織の形態を植え付けうる資本主義の歴史上の決定的瞬間とみなす。この組織化のスタイルは、協同組合と労働者管理の試みとしての「インフォーマル部門」活動の社会的結合を通じても生起しうる。

フレキシブルな蓄積の状況は、端的に言って、労働者やコミュニティの管理を別なやり方で資本主義が実行できるように見せている。左派の政治イデオロギーの力点はそれゆえ、伝統的なマルクス主義よりも社会民主主義や無政府主義からかなり多くのインスピレーションを受けて、「実行可能な」分権化した社会主義へと移行した。このことは、社会主義諸国の中央集権化した計画機構に対する激しい外部からの攻撃や内部批判に対応している(例えば、Nove, 1983)。

左派の政治的实践もほとんど同じ方向に展開してきた。英国の革新自治体、合衆国の経済民主主義とコミュニティ管理、そして西ドイツの「緑の党」によるコミュニティ動員が、その傾向を描出している。地方・地域の両レベルで、地方の利害を守り権限を付与するためにできることは明らかにたくさんある。コミュニティや宗教組織は積極的に工場買い取りや工場閉鎖に対する闘いを支援し、また別のやり方で伝統的な低所得コミュニティ連帯の互助メカニズムを支援している。それらをとりまく人びとに、より多くの権限の付与を推進してゆくような諸制度もできよう。これに共鳴する国家装置が(サービス供給、住宅供給、生産において)協同組合を支援するための方策を見つけ出し、地元の人材の開拓を通して技術養成を奨励する方策を見出すことができるかもしれない。コミュニティへの再投資や協同組合による努力、そして近隣地区開発組合を支援するために、金融制度に圧力をかけることもできる。スペクタクルさえもが政治的大義によって組織されるのだ。ならばプランナーは、近隣地区の改変が集会的記憶を破壊するのではなく、むしろそれらを確実に保存してゆくべく努力できるのである。廃工場は、赤の他人に人の歴史を領有されてしまうような分譲マンションやブティックに転用されるよりも、そこに生き働いていた人びとの集会的記憶が保存されるようなコミュニティ・センターに変えられるほうが

はるかによい。

しかし、深刻な危険がある。理論と実践の両者とも、断片化と物象化を強める効果を有している。資本主義のグローバルなフレキシビリティがかつてないほど大きくなっているこの時代に、場所、コミュニティ、都市、地域あるいは国家さえも「それ自体をモノ」として見なすのはけしからぬことだ。こうした考え方に追従してしまうと、フレキシブルな蓄積の極度に中央集権化した力に対してますます脆弱になってしまうのである。というのも、場所やコミュニティの個性を無視することは、とりもなおさずグローバルな過程の性質を無視することと同じくらい、地理学的に節操もなくナイーブなことであるからだ。このような視点のみから実践してゆくと、積極的抵抗や社会主義的変革のポリティクスというよりは、むしろ順応や服従のポリティクスにはまってしまう。

とはいえ抵抗や変革のグローバルな戦略は、場所とコミュニティの現実から始められなければならない。問われているのは、草の根的なローカルな抵抗に忠実であり続けながら、ますます中央集権化するフレキシブルな蓄積の力に対応する中央集権化されたポリティクスを見出すことである。西ドイツの「緑の党」と合衆国の虹の連合はそのような諸問題を取り上げているようではあるが、これらの新たにつくり出されたイデオロギーを、以前の蓄積体制への応答のなかで形成されたより伝統的な対抗政策(しかしながら、ラディカルな個人主義、新保守主義、あるいは解放の記号としてのポスト・モダニズムを除く)と一緒にたにしてしまうところに困難がある。ここには、進歩的勢力にとって、地元 local、地域、国家のそれぞれのレベルで、フレキシブルな蓄積が解き放ってきた社会変化の激動の中からより統合された対抗力を創り出すハードな実践的・知的作業をなす多くの余地がある。

しかしながら、これは主として抵抗のポリティクスについて語るものである。よりラディカルな変革のポリティクスとは何か? 資本主義はつねに前社会主義の状態にありながら、社会主義への移行とおなじぐらいに大胆なことを考えるアジェンダは今日ではまれである。ブルデュー(Bourdieu, 1977, pp. 168-169)が、その理由への糸口を与えてくれるかもしれない。

議論されないものを議論の俎上にのせ不明確なものは明確なものにする批判は、その可能性の状況次第では客観的危

機をともしない、主観的諸構造と客観的諸構造をつなげ合わせる媒介を断つことで自明性を実質的に破壊する。

危機的状況下でのみわれわれはラディカルに新しく思考する力を持ちうるのであり、というのもそうならば「われわれ自身の恣意性の中立化」を再生産することが不可能になるからである。すべての主要な社会革命は、ブルジョアの統治力が破綻をきたしたさなかに起こってきた。

近代資本主義というガタのきた大建築物には多くのひびがはいっており、それらは少なからずフレキシブルな蓄積に固有のストレスに起因する。世界の金融システム——現在の蓄積体制における中心力——は混乱しており、将来労働者に莫大な請求を押しつける過剰な負債に圧迫され、大量の債務不履行、激しいインフレーション、または抑圧的なデフレーションを除いて解決の方法は見出し難い。フレキシブルな蓄積によって解放された創造的破壊の危険性と力は、しばしば多くの分節化した人口にあまりにひどい犠牲をもたらし、そこから激しい地政学的抗争を引き起こしてきた。これらは（1930年代にそうなったように）たやすく管理のもとからはずれ、まともな政治経済的ユニットたる西洋を解体する（保護貿易主義・金融「戦争」は今では日々のニュースでおなじみとなってきた）。しかしながら、危機的傾向にあろうとも、資本主義的システムは危機にあるわけではないし、もしそうであったらわれわれの生活はどうかと心配する者もほとんどいない。それどころか、このシステムはあまりに不安定なので、その不安定さを語ることさえもがそれに動揺をきたすのでふさわしくないと見なされるのだ。

このことは、わたしに第二の主要な論点をもたらす。客観的危機は一つの必要条件であると思われるが、しかしそれはけっして主たる社会変革の十分条件ではない。後者は権力の空白へ踏み込み、それをもって真に創造的にことをなすことができる政治力の上昇に依存している。そのような政治力の本質が差異を作り出すのはいうまでもない。つまり、マルクス自身の両極性をもちいれば、野蠻への移行か、それとも社会主義への移行か、という間にある。現在のところ権限剥奪された人びとが発言権を持つためには、彼らはまず「自分たちに押しつけられたリアルさの規定を拒絶する物質的・象徴的手段」（Bourdieu, 1977, p. 169）を保持し

なければならない。しかしながら、ウィリス（Willis, 1977）が教えてくれるように、権限剥奪された人びとが彼ら自身の象徴的な表現手段を發展させ、それは多くの点で教育者が彼らに押しつけるものよりもより正確に彼らの社会的世界を表現するのである。「ドロップ・アウト」や反抗的なインナーシティのサブ・カルチャーは、それらに特徴的な言語を持ち、今までにもまして広がり、活気に満ちている。しかし、その言語は、それが空間に捉えられた言語であるというだけの理由からしても、グローバルな諸過程を転形させるといよりは、むしろそれに順応しているのであり、そのことは大衆への権限付与を不可能にする。

批判理論はここで一つの役割をもつ。しかし、それは自己批判的である場合に限られもする。まず、すべての批判理論は（グラムシの言い回しを用いれば）「組織的知識人」の集団の実践として現われるからして、その特質は実践者が存在する階級と領域に依拠している。研究者や専門家とて免れるわけではない。われわれの批判理論は、したがって、労働者階級の文化的・政治的実践で表明される批判理論から区別されるある特質を持っているのだ。現在のところ権限剥奪された人びとへの真の権限付与は下からの闘争によって勝ち取られねばならず、上から気前よく与えられるものであってはならない。それゆえ階級や階級をわける副次的な集団がフレキシブルな蓄積に対抗するやり方は、真剣に取り上げられなければならないのである。すべての面で、階級や領域的同盟の言語を規定する諸実践を見つけることが問題であり、またそこからフレキシブルな蓄積に対するよりグローバルな対抗戦略が生じしうなのだ。

そのような批判理論でさえ、これに答えつくことはできない。しかし、それは少なくとも、そうした問題を提起することはできるし、そうすることで、いかなる移行にあっても対処しなければならない物質的なリアリティが何であるのかを明らかにできるのである。それはおそらくわずかな貢献であろう。しかし、意味ある転形がもたらされるのは、そのような小さな貢献の集まりからなのである。フレキシブルな蓄積の現体制、ポスト・モダニティの文化的実践、そして都市空間形成による物的空間・社会的空間の再形成についての批判的な評価は、われわれがその形成過程を理解するためのイデオロギーについて省察を行うこととも

に、明らかに病身で故障がちな資本主義のヘゲモニーに対するグローバルな抵抗運動の再構築へ向けてのひとつの小さな、しかし不可欠な準備段階のように見えるのである。

註

- 1) 空間的実践のジェンダー的、人種的、民族的、そして宗教的な内容も、コミュニティ形態や、都市的な道具立てにおける社会的空間の生産の詳細な説明から考察される必要がある。スティンプソン (Stimpson, 1981)、ローズ (Rose, 1984)、シュレイとディ・グレゴリオ (Shlay and Di Gregorio, 1985)、そしてスミス (Smith, 1987) らの研究において、ジェンダー的側面についてはすでに着手されてきた。
- 2) わたしはここでフィリップ・シュマント Phillip Schmandt の研究に多くを負っている。
- 3) わたしは、バルト (1977) が、劇場として、つまりスペクタクルとして遊びに満ちた空間である都市について探究することが、都市デザインの理論と実践の両方より重要になったことと同時に、悦楽の概念を哲学的品行方正さのなかに持ち込んだことに対して注目せざるを得ない。わたしはまた、都市構造は悦びをもって「テキスト」として読まれ解釈されるもの、という認識評価が、都市の区域すべてを「歴史保全地区」と申告して不動産業が得る免税と何らかの関係がある、とも思うのだ。
- 4) ロッシ (1993) は、自身の建築学的実践の理論を、数人の地理学者、とりわけヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュの思想にもとづき、「生活様式」の継続のための道具立てとして、また集合的記憶の場として近隣地区を重要なものとみなす。わたしの観点からすれば、ロッシは誤った地理学者を選んでいる。というのも、ヴィダルは周知のように、少なくとも彼の生涯の終わりおよびまったく無視された『*Geographie de l'Est*』にいたるまで、資本主義的な社会諸関係のもとで生じた社会的・物的景観のダイナミックな変化を探究しようとしなかったからである。

文献^{註3)}

- アグリエック, M. 著, 若森章孝・山田鋭夫・大田一廣・海老塚明訳 (1989): 『資本主義のレギュレーション理論: 政治経済学の革新』大村書店. Aglietta, M. (1974): *A Theory of Regulation*. NLB, London.
- ヴェンチャーリ, R.・スコット・ブラウン, D.・アイゼナワー, S. 著, 石井和紘・伊藤公文訳 (1978): 『ラスベガス』鹿島出版会. Venturi, R., Scott-Brown, D. and Izenour, S. (1972): *Learning from Las Vegas*. MIT Press, Cambridge, Mass.

- ジェイコブス, J. 著, 黒川紀章訳 (1969): 『アメリカ大都市の生と死』鹿島研究所出版会. Jacobs, J. (1961): *The Life and Death of Great American Cities*. Vintage, New York.
- ジェンクス, C. 著, 竹山 実訳 (1978): 『ポスト・モダニズムの建築言語』(『建築と都市』1978年10月増刊号) エー・アンド・ユー. Jencks, C. (1984): *The Language of Post-Modern Architecture*. Academy Editions (fourth edition), London.
- ジンメル, G. 著, 元浜清海・居安正・向井守訳 (1994): 『貨幣の哲学 上・下』白水社. Simmel, G. (1978): *The Philosophy of Money*. Routledge and Kegan Paul, London.
- タフーリ, M. 著, 藤井博巳・峰尾雅彦訳 (1981): 『建築神話の崩壊: 資本主義社会の発展と計画の思想』彰国社. Tafuri, M. (1976): *Architecture and Utopia*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- ドゥボール, G. 著, 木下 誠訳 (1993): 『スペクタクルの社会: 情報資本主義批判』平凡社. (Debord, G. (1983): *Society of the Spectacle*. Black and Red Books, Detroit.)
- ハーヴェイ, D. 著, 水岡不二雄監訳 (1991): 『都市の資本論』青木書店. Harvey, D. (1985): *The Urbanization of Capital*. Basil Blackwell, Oxford.
- バルト, R. 著, 沢崎浩平訳 (1977): 『テキストの快楽』みすず書房. Barthes, R. (1975): *The Pleasure of the Text*. Hill and Wang, New York.
- ピオリ, M.・セーブル, C. 著, 山之内靖・永易浩一・石田あつみ訳 (1993): 『第二の産業分水嶺』筑摩書房. Piore, M. and Sabel, C. (1984): *The Second Industrial Divide*. Basic Books, New York.
- ブラッドベリ, M.・マクファーレン, J. 編著, 橋本雄一訳 (1990, 1992): 『モダニズム (1, 2)』鳳書房. Bradbury, M. and McFarlane, J. (1976): *Modernism*. Pelican, Harmondsworth.
- ブルデュ, P. 著, 今村仁司・港 道隆訳 (1988): 『実践感覚 1』みすず書房.
- ブルデュ, P. 著, 石井洋二郎訳 (1989, 1990): 『ディスタクシオン: 社会的判断力批判』藤原書店. Bourdieu, P. (1984): *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. Routledge and Kegan Paul, London.
- ベンヤミン, W. 著, 久保哲司訳 (1995): 『パリ——19世紀の首都』. ベンヤミン, W. 著, 浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション① 近代の意味』ちくま学芸文庫, pp. 325-356. (Benjamin, W. (1973): *Charles Baudelaire: A Lyric Poet in the Era of High Capitalism*. NLB, London.)
- マルクス, K. 著, 資本論訳訳委員会訳 (1983): 『資本論』第1巻第2分冊, 新日本出版社, pp. 249-543. Marx, K. (1967): *Capital* (volume 1). International Publishers, New York.
- マルクス, K. 著, 資本論草稿集訳訳委員会訳 (1993): 『資本論草稿集』第2分冊, 大月書店. Marx, K. (1973): *Grundrisse*. Penguin, Harmondsworth.
- ロッシ, A. 著, 大島哲蔵・福田晴彦訳 (1993): 『都市の建築』大龍堂書店. Rossi, A. (1984): *Architecture and the City*. MIT Press, Cambridge, Mass.

- Armstrong, P., Glyn, A. and Harrison J. (1984): *Capitalism since World War II*. Fontana, London.
- Berman, M. (1982): *All That is Solid Melts Into Air*. Simon and Schuster, New York.
- Bouinot, J. ed. (1987): *L'Action Economique des Grandes Villes en France et a l'Etranger*. Economica, Paris.
- Bourdieu, P. (1977): *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Castells, M. and Portes, A. (1986): World underneath: the origins, dynamics, and effects of the informal economy. *Conference on the Comparative Study of the Informal Sector*. Johns Hopkins University, Baltimore.
- Clark, T. J. (1985): *The Painting of Modern Life: Paris in the Art of Manet and his Followers*. Knopf, New York.
- Clavel, P., Forester, J. and Goldsmith, W. (1980): *Urban and Regional Planning in an Age of Austerity*. Pergamon, New York.
- Crenson, M. (1983): *Neighborhood Politics*. Harvard University Press, Cambridge.
- Eagleton, T. (1987): Awakening from Modernity. *Times Literary Supplement*, February 20th, 1987.
- Fainstain, S. Fainstain, N., Hill, R., Judd, D., and Smith, M. (1986): *Restructuring the City*. Longman, New York.
- Firey, W. (1945): Sentiment and symbolism as ecological variables. *American Sociological Review*, 10, pp. 145-160.
- Frampton, K. (1985): Critical regionalism: speculations on an architecture of resistance. In Johnson, C. ed., *The City in Conflict*. Mansell, London.
- Frisby, D. (1986): *Fragments of Modernity*. Polity Press, Oxford.
- Giddens, A. (1984): *The Constitution of Society*. Polity Press, Oxford.
- Hanson, R. ed. (1983): *Re-thinking Urban Policy: Urban Development in an Advanced Economy*. National Academy of Science, Washington, D. C.
- Harvey, D. (1985): *Consciousness and the Urban Experience*. Basil Blackwell, Oxford.
- Harvey, D. (1988): The geographical and geopolitical consequence of the transition from fordist to flexible accumulation. In Stemlieb, G. and Hughs, J. W. eds. *America's new market geography: nation, region, and metropolis*. The State University of New Jersey, pp. 101-134.
- Harvey, D. and Scott, A. (1989): The practice of human geography, theory and specificity in the transition from fordism to flexible accumulation. In Macmillan, W. (ed): *Remodelling Geography*. Basil Blackwell, Oxford.
- Huyssen, A. (1984): Mapping the Post-modern. *New German Critique*, 33, pp 5-52.
- Jager, M. (1986): Class definition and the esthetics of gentrification. In Smith, N. and Williams, P. (eds.): *The Gentrification of the City*. Allen and Unwin, London.
- Jameson, F. (1984a): The politics of theory: ideological position in the post-modernism debate. *New German Critique*, 33, pp. 53-65.
- Jameson, F. (1984b): Post-modernism, or, the cultural logic late capitalism. *New Left Review*, 146, pp. 53-92.
- Lefebvre, H. (1991): *The Production of space*. Basil Blackwell, Oxford.
- Markusen, A. (1986): Defense spending: a successful industrial policy. *International Journal of Urban and Regional Research*, 10, pp. 105-122.
- Nove, A. (1983): *The Economics of Feasible Socialism*. Allen and Unwin, London.
- Redclift, N. and Mingione, E. eds. (1985): *Beyond Unemployment: Household, Gender, and Subsistence*. Basil Blackwell, Oxford.
- Rose, D. (1984): Rethinking gentrification: beyond the uneven development of Marxist urban theory. *Society and Space*, 2, pp. 47-74.
- Shlay, A. and Di Gregorio, D. (1985): Same city, different worlds: examining gender and work-based differences in perceptions of neighborhood desirability. *Urban Affairs Quarterly*, 21, pp. 66-86.
- Scott, A. and Storper, M. eds. (1986): *Production, Work, Territory: The Geographical Anatomy of Industrial Capitalism*. Allen and Unwin, London.
- Smith, N. (1984): *Uneven Development: Nature, Capital, and the Production of Space*. Basil Blackwell, Oxford.
- Smith, N. (1987): Of Yuppies and housing, gentrification, social restructuring, and the urban dream. *Society and Space*, 5, pp. 151-172.
- Smith, N. and Lefavre, M. (1984): A class analyzing of gentrification. In Palen, J. and Lodon, B. eds. *Gentrification, Displacement, and Neighborhood Revitalization*. State University of New York Press, Albany.
- Stimpson, C. ed. (1981): *Women and the City*. Chicago University Press, Chicago.
- Szelenyi, I. ed. (1984): *Cities in Recession: Critical Response to the Urban Policies of the New Right*. Sage, Beverly Hills.
- Tabb, W. (1982): *The Long Default*. Monthly Review Press, New York.
- Willis, P. (1977): *Learning to Labor*. Saxon House, Farnborough.
- Zukin, S. (1982): *Loft Living: Culture, and Capital in Urban Change*. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

訳注

- 1) ルフェーブル自身は、知覚されたもの the perceived、想像されたもの the conceived、生きられたもの the lived のトリアードとしている (例えば、Lefebvre, 1991, pp. 38-41)。
- 2) 1989年に刊行された『*The Conditions of Postmodernity*』では、この三つの他にさらに「空間の生産」という次元が設定されて、以下の付表のように改変されている (pp. 218-219)。「空間の生産」は、「土地利用・輸送・伝達、

領域適組織化などの（実際の・想像の）新たなシステムがどのように生産されるのか、そして表象（例えば、情報技術、コンピューター化された地図化、デザイン）がどのように生起するのか、を説明する。」

3) ハーヴェイが参照した文献と日本語訳で使用された版（あるいは編集方針）が異なる場合は、（ ）内にハーヴェイが掲げた文献を示した。また、日本語訳は一部書き改めて引用したものもある。

付 表

| | 近接性と遠隔化 | 空間の領有と利用 | 空間の支配と管理 | 空間の生産 |
|-------------------|---|--|---|--|
| 物質的な空間的实践 (経験) | 商品・貨幣・人口・労働力・情報などのフロー、輸送・通信システム、市場・都市の階層性、集積 | 土地利用と建造環境、社会空間やその他の「なわぼり」の指定、伝達・互助の社会的ネットワーク | 私的土地所有、国家・行政による空間分割、排他的なコミュニティ・近隣住区、排他的なゾーニングと社会的管理のその他の形態（警備・監視） | 物的インフラストラクチュアの生産（輸送・通信、建造環境、土地整理など）、社会的インフラストラクチュアの（公式・非公式の）領域的組織化 |
| 空間の表象 (知覚) | 距離の社会的・心理的・物理的な尺度、地図作製、「距離の摩擦」の諸理論（最小努力の原則、社会物理学、財の到達範囲、中心地理論や他の形態の立地論） | 個人的空間、占有された空間のメンタル・マップ、空間的階層性、空間の象徴的表象、空間的「言説」 | 禁じられた空間、「領域から発せられる至上命令」、コミュニティ、地域文化、ナショナリズム、地政学、階層性 | 地図化・視覚的表象・伝達の新システム、新たな芸術・建築の「言説」、記号論 |
| 表象の空間 (想像) | 魅惑／拒絶、距離／欲望、近接／拒否、超越、メディアはメッセージである」 | 親密性、家庭、オープンな場所、大衆スペクタクルの場所（街路・広場・市場）、図像と落書き、広告 | 疎遠性、恐怖の空間、財産と所有、モニュメント性と構築された儀礼空間、象徴的障壁と象徴資本、「伝統」の構築、抑圧の空間 | ユートピア的プラン、想像の景観、空想科学の存在論と空間、芸術のスケッチ、空間と場所の神話、空間の科学、欲望の空間 |